

Sustainable EWS

- Together We Can -

早期警戒・早期行動により
災害による被害(死者や損害)を減らす
そしてそれを
持続可能な形で実現するのが
「Early Warnings for ALL」

課題

認知	Early Warnings “for All” がEWS initiativeの重要なポイント 認知のために裾野を広げる活動が必要
ローカルデータ	現地の観測データが安定して確実に手に入ることが 事前察知・直前察知・予測の情報精度担保に大きく寄与する しかし現地データが得られていないことも多い
コラボ	現地の団体やEWS協議会とのコレボレーション・インテグレーション、 「アレないの？コレないの？」と落雷・空気品質・渋滞情報などの要望を受ける ことも多い EWS協議会メンバーとのコラボレーションでより効果的な活動を目指したい

解決のために

無料	無償サイトで公開 広告等の効果およびPush Notificationの付加価値で「持続可能な」インフラを目指す
ローカル	Globalの無償気象サイトは数多くある。差別化に必要な要素のひとつは「ローカル」。 現地アプリとの協働により「ゼロからのスタート」ではなく、「1以上からのスタート」を目指す 現地連携は現地機関の理解(データ提供等の理解)も得やすい
コラボ	WNI展開サービスに他社データを掲載 WNI気象データの提供も同様。API(Application Programming Interface)での提供を想定

	解決策① フリー	解決策② ローカル	解決策③ コラボ
	無償サイトを公開。 Push Notification等付加価値による有償化 やサイトの広告価値でビジネス化	現地政府アプリ・サイト 現地民間アプリ・サイト との協働	弊社サイト・アプリへ他社データ統合（無償サイトへの 掲載は無償で） WNIデータのAPI提供も同様
課題① 認知不足	無償にすることで裾野が広がりやすくなる 公共機関・政府機関等が広報しやすくなる	現地化によりゼロからのスタートではなくなる 現地に寄り添ったサービスになる	「協議”会”」として官民連携の公共性を活かす ※一社・一団体では「営利活動」の抵抗感を示されることもある
課題② ローカルデータ不足	ローカルデータの中でも現地公共機関による観測データは無償公開との親和性が高い	「データ提供者との協働」という建付けはデータ提供者がデータ提供する際のハードルを下げるができる	協働により各社が持つデータの持ち寄りが可能に 様々なチャネルの活用により現地事前察知・直前察知データ入手も促進
課題③ コラボ不足	協議会メンバーとしても公共性の高い取り組みが可能に	現地パートナーを「協議会メンバー全員にとって対等の第3者」として協議会メンバー内の協働促進につながる	複数団体の連携による新たな価値の創出

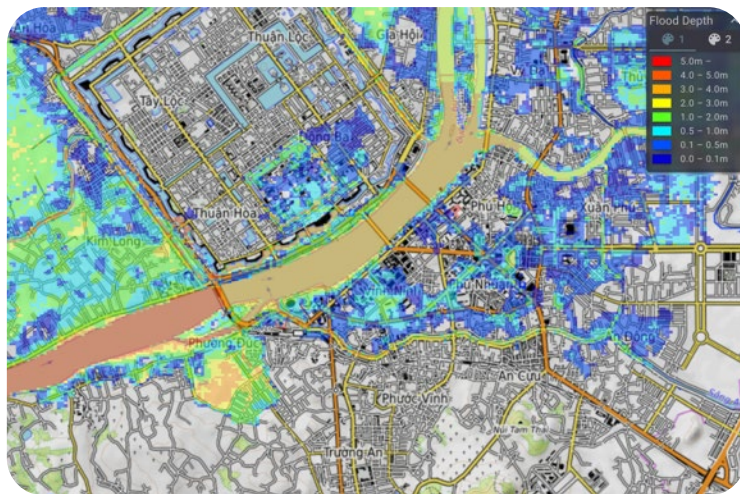
“for All”のための認知/裾野を広げる活動が必要

現地ローカルデータ(特にレーダー等)が確実に手に入ることがサービスの担保に大きく寄与するかつ現地データ提供者と協働しやすい

EWS協議会との
コラボレーション
インテグレーション

早期警戒・早期行動

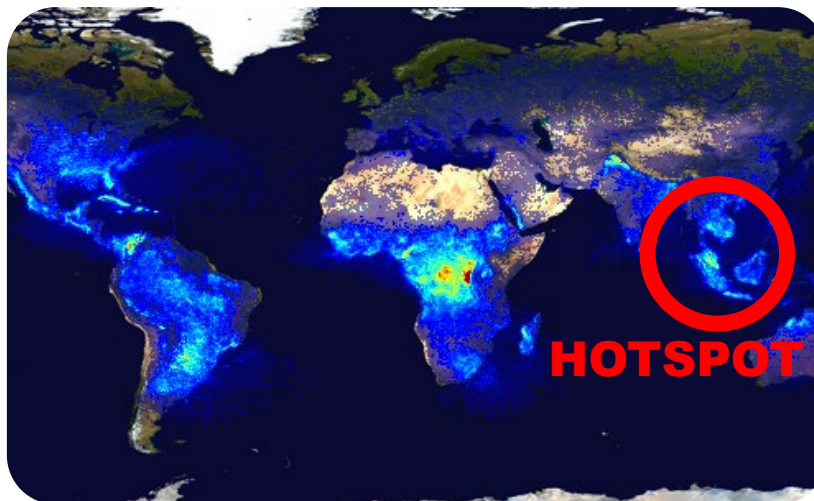
被害想定に基づく事前対策
(いわゆるハザードマップ)



[Floods*](#)

早期行動

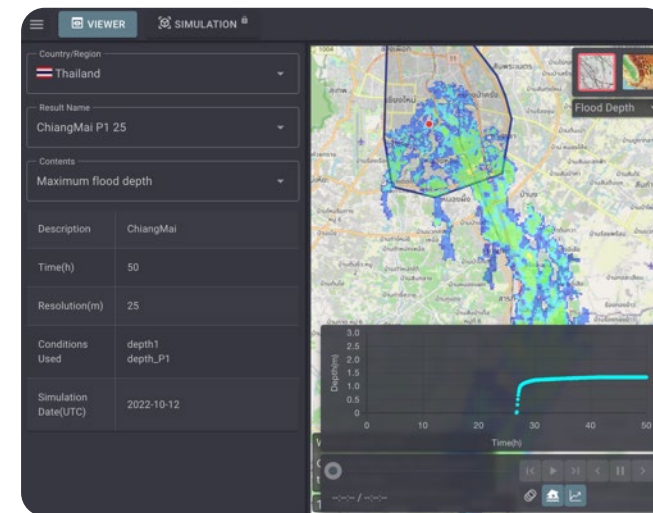
ナウキャスト
落雷情報



[NASA/Goddard Space Flight Center
Scientific Visualization Studio](#)

早期警戒

フォーキャスト
洪水予測



[Floods*](#)